

成長するための「枠」

—— 人間教育のひとつの意味 ——

木村 晴子（南山短期大学教授）

画用紙とサインペンが用意され、心理テスター（あるいは治療者）がまず、用紙の縁に沿っておおまかに枠を書いてみせる（図-1）。

その画用紙を被検者に手渡し、「さあ、これからここに私の言う順序で絵を書いてもらいます。まず川をかくてください……」

中井久夫の開発した「風景構成法」^④の最初のステップである。人はなんらかの枠組みを与えられると、守られているという安心感を覚え、その中で自由に自らを表現できるという経験から設定されたテスト状況である。

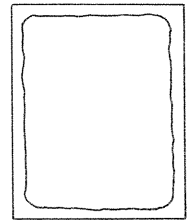


図-1

先年亡くなった、ユング派の心理療法家ドラ・カルフ女史が開発した箱庭療法^⑤の基本的な治療要因の1つに「自由で保護された空間」^⑥ (freien und zugleichgeschützten Raum) の概念がある。腰のあたりの高さにあり、無理なく全体が視野に入る大きさの砂箱（内法57×72×7 cm）の中に種々のミニチュア玩具で小世界を構成する箱庭作りは、制作者のかなり深い無意識の世界が展開されるという点で、自己表現による心理療法の一技法として相当普及してきている。ここにいう保護された空間とは、砂箱の枠および治療者の患者に対する心理的守りの両面を含んでいる。初めに述べた風景構成法は、中井がこの箱庭療法の理論にヒントを得て考案されたものである。

こうした空間的、心理的な枠の守りは、その中で人が普段実現できないようなことを試みてみたり、自分でも気づかぬ心の深い層を表現することを促進するような機能を果していると言える。

ここではそうした「枠」の機能に焦点をあて、人間関係科での学ぶための枠と成長について述べる。

教育の場での「枠」

教育の現場、特に日本における高等学校までの教育の場における様々な枠づけは、非常にrigidなものが多く、生徒はそのほとんどを決められた枠組みの中で育っていく。カリキュラム、時間、学習場所、内容、そして授業形態……すべてが準備された枠組みの中で、被教育者は「もっと自由にしたい!」「今やっていることが一体役に立つのか?」と思うことも多い。この傾向は近年ますます顕著になり、現代の風潮としてしばしば取り上げられる高校中退者の激増とも無関係とは言えない。筆者はそうした「固い教育」の意味がまったくないとは思わない。極端な管理教育にしたところで、それが生まれてくるプロセスにもそれなりの意味があったのであろうし、またこれに出会い、その中で埋没してしまわぬ自我を育むと言う意味では、それに対処していく自分を体験することそのものにも意味があると筆者は考えている。

しかしながら、確かに現代日本の教育においてはネガティブな意味での枠付けがあまりにも多くの弊害を生み出してきていることは認めざるをえない。

人間関係科の教育における「枠」

そんな中で人間関係科の教育は「冒険的」試みであると言われてきた。ここではまず、従来学生たちが体験してきたこのような枠をできるだけ外そうとする。例えば、あらかじめ用意されたことを与えられるのではなく、自分たちで考え、動くこと、既成のものから学ぶのではなく、各自のナマの体験を素材にすること、一般的な意味での「評価」をしないこと……これらは大多数の教育の場で当然とされている「枠」を外そうとした試みであると言ってよい。

それでは、「枠」を外すと人の心の内部で一体どのようなことが起こるのだろうか? 人の心の世界を単純に図式化すると、図-2のような説明ができる。普段我々は、自分で意識的に把握できており、自分の主体性でコントロールできる範囲での心の部分(A)に頼って生活している。これを精神分析の分野では意識の世界と呼ぶ。それに対し、自分が気づいていない、心の深い部分としての無意識の世界(B)がある。こうした心の構造については精神分析各派の数多くの文献や研究があるのでここでは述べない。

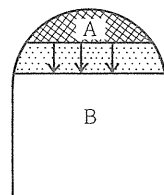


図-2

既成の教育の枠内においては学生たちは(A)の世界の中で対処できる体験を重ね、知識を蓄積していく。そうしたとき、従来の教育のやり方に入らぬ授業形態に出会うと(枠を外すと)、これまで通りの仕方では対処し切れなくなり、矢印のような現象が起ってくる。すなわち、これまでの自分の価値観、思考、行動様式にはなかったものに直面し、それに対応していかざるをえなくなるのである。それは当人にとっては初めての、そして危機的な状況でもある。しかし、そういう体験を通して人はそれまでの自らの意識界にはなかった新たな

な自分に出会い、それを自分のものにし、心の成長が実現していくのである。

人間関係科の教員である我々は、こうした視点から、学生が自らのさまざまな可能性を実現するために、彼らが成長の力を発揮できるための場、リソースを用意し、できる限り従来の教育の固い枠を外し、学生の成長の可能性を信じて待つ、という姿勢を取ろうとしている。

しかしながら、かといって枠をすべて外すのが良いかと言うと必ずしもそうではない。自由がいい、といいながら、人間は際限のない自由の中ではかえって不安を感じ、恐れさえ覚えるものであるといわれている。南短に入学した人関生が当初は英語科に比べて宿題もテストも少なく、遊びのように思われる毎日を楽しく感じるが、しばらくすると「こんなに「勉強」しなくていいのだろうか？」と不安になる時期がある。学生にとって、従来の枠を外された中に置かれるのはある意味では危機的な体験である。強制的な枠組みを外されるとホッとほするが、人は一方で、自分に任された不安を感じ、一体どうして良いかわからなくなるのである。

我々もすべての枠を取り払っているわけではない。冒頭に述べたように、「守りとしての枠」はその中で人をより自由にし、普段の枠組の中では出すことの出来ない試みを可能にする。人間関係科での授業はそうした枠の中で行われているといつてよい。

体験学習におけるラボラトリー・トレーニングの、ラボラトリー自体、「枠」そのものである。日常場面での既成の枠を外し、特殊な枠の中で自由に動いてみる。それは教師（orファシリテーターorトレーナー）によって大きく守られている枠であり、普段では出すことの出来ない自分を表現することを試みることができる——それは“無意識が動き出す場”であるといえる。

次に具体的な授業を例にあげながらこうしたことを考えていく。

<フィールド・ワーク>

入学後、若干のオリエンテーションの後に始まるフィールド・ワークは1年生にとって最も強いインパクトを受けるものであることはいうまでもない。高校卒業間もない学生たちは障害児に対する知識や介護のスキルはまったく持っていない。「フィールドに出て生きてみる」とか、「自分を役立ててみる」とかいった漠然とした“ねらい”だけを背負って各フィールドへ出かけていく。そこでは「あなたたちは何をしにきているの？」と問われることもあり、何をしなさい、してください、とも言われぬ状況が待ち構えているのである。

教育実習生であれば忙しい。指導の仕方、授業の組み立て方、評価のポイントなど、こなさなければならない具体的な課題が山ほどあり、磨かなければならないスキルも多い。それに比してフィールド・ワークでの人関生はなんととも曖昧な場に立たされるのである。それは彼らにとってこれまで身につけてきた行動様式では対処しきれぬ、ある種の危機的な状況である。これまで生きてき

た枠組みでは通じない場に置かれるとき、人は今まで気づくことのなかった自らの未知の部分に動員せざるをえなくなってくる。つまり、こころの無意識の部分が動き始めるのである。そうしたとき、各人の中に何が起り、どんな反応をし、どういった動きを取ろうとするのかは興味深いことである。それはその人が未知の自らへの気づきを深め、成長していく1つの重大なステップとなるからである。

<T合宿>

人間関係科創設時より必修の重要な科目として続けられている5泊6日のTグループ合宿も、日常の枠を外し、特殊な枠組みの中で起こる体験に焦点を当てたものである。Tグループが始まる時、「ここでは時間と、場所と、メンバーのみが決まっています」といった説明を受ける。学生たちはまず、この奇妙な設定の中に置かれて困ってしまう。次に、自分たちがこれまでに使ってきた既存の枠組みの中から対処の仕方を捜し出してきて、それをやってみようとする。セッションの初期にしばしば提案される自己紹介、テーマを決めてのディスカッションなどがそれである。しかし、そうしたやり方では何かおかしい、うまくいかない、スッキリしない、と感じ、次に新しい“何”かが動き始めるのである。フィールド・ワークやT合宿に代表される人間関係科の授業は、学生がその中で自由に、十分に自分を試し、表現してみることが出来る新しい「枠」を提供することである。そうするとき、それは各人の無意識を揺り動かす場となり、自らの新たな可能性が浮かび上がってくるきっかけとなるのである。

体験と自己成長——言語化の意味

次に、実習を主とし、プロセスを重視する人間関係科での授業形態が、「自分」を造っていくのにどう関係し、どのように役だっているのかを「枠」に関連づけながら述べる。

人間関係科の授業の中で行うさまざまな実習とそれに続く“ふりかえり”は、一体何のためのものなのか？ これらは体験学習のステップに基づいて構成されているが、ここではこうした実践の意味を、体験→指摘→分析→仮説化……の体験学習の図式とは少し異なった視点から考えてみる。先にも述べたように、人は意識の世界で自らを確認し、理解し、行動を選び、決定しつつ生きている。そして、「私は～である」、「私が～する」、「私が～と思う」など、“ワタシ”の主体となるのが、この意識の分野の中心である“自我”である。すなわち、意識の世界は自我がコントロールする世界であり、「ワタシ」が主体となつてさまざまな経験をし、それらの中から取捨選択してその内容を意識に組み入れていくのである。生後間もない赤ん坊の心の世界を我々は知ることはできないが、それは混沌として、無意識そのものといってよいのではなからうか。そこから出発して子どもは毎日の体験の中からさまざまな内容を取り出し、意識

に組み入れていく。成長するにしたがって人間は、自分は～であり、～は～である、～すれば～になる、ということを意識の世界に蓄積していく。それでは意識の世界はどのようにして作られていくのか？ フランスの精神医学者アンリー・エーは「意識するということは体験を自らに語ることである」と述べている。すなわち、体験したことの中から意識に組み込まれ、残っていくものは、言葉にして語り、確認することができるもののみであり、意識化とは言語化することであるといつてよい。ここにグループ実習の後行われる“ふりかえり”の作業が大きな意味を持つてくる。作業中にあったこと、感じたこと、考えたことを、そのままにしておくのではなく、言葉にしてメンバーの中で発表し、伝え、あるいはふりかえり用紙に記入して言語化していく。そうすることによって初めて、実習を通して得たことが自らのものとして意識化され、根づくのである。

現実に体験することは数多くある。しかし、その多くが時間とともに振り落とされていく。落ちていくものの中にもいろいろなものがある。自我が選択し、どうしてもよいものは落とされていくし、また自我が認めたくない内容を持つものも排除されていく（抑圧）。しかし、こうしたものの中にもその人の成長にとって大切なものが含まれていることも多いのである。普段の生活の場面の中でも意識化はもちろん行われる。しかしながら、日常の体験を重ねる中では気づくことがないまま流されてしまうことがあまりにも多い。

それで、「体験するための枠」を用意する——これが実習である。この枠（ラボラトリー）でメンバーは自由に動くことを保証される。これまで述べてきた「枠」の機能が働き、守られるという感じを持つことができる。その中であるから思い切った試みもし、自分を試すことができる。適度な枠の中で動き、意識してそこでの自分に焦点を当ててみる。守られた状況内であるから、失敗してもよい。失敗の中にはむしろ役立つものがたくさん含まれているから、それも貴重なデータとなる。枠の中で気づいたことを言語化し、フィードバックしていくこと、「ねらい」でみるべきものを焦点づけることも「枠づけ」の一端であるといえよう。そして言語化（意識化）していく。これを重ねていくことが「自分」を造っていくことになる。体験学習は、自分を造るための「枠」を用意する場であるといつてよい。

従来持っている既成の枠を外し、そこで起こることに注目していくこと——無意識を揺り動かすような場を作り、そこに浮かび上がるものを大きな枠組みで守りつつ見守っていくこと、外から、あるいは上から教え込むのではなく、その人のなかから生まれてくるものを大切にしていくこと——これらは心理療法の基本的な考えと同じである。プレイ・セラピーに來た子どもが初めに感じる「なにをしても許される場」での困惑、カウンセリング・ルームへ連れてこられた不登校児が、「学校へ行け」と言われないばかりか、登校のことに触

れられずに自由にしているも受け入れられると言う保証を感じたときの戸惑い、あるいは、すぐに良い方法を教えて貰えると思って訪れた相談室で、具体的な答えはなにも貰えないとわかった面接初期の驚きと不満……これまでの体験にない新しいものがそこから動き始めるのである。

人間が持つ自己治癒の力を信じて待つのは心理療法の最も基本的な姿勢である。人間関係科での体験学習の実践は、無意識が動き出す「枠」を用意し、より高次の自己統合へと進んでいく場を提供する、という意味で、治療教育（治療的配慮を持った教育）であると言える。

参考文献

- (1). A・エー 大橋博司訳：「意識」 みすず書房, 1971.
- (2). D・カルフ 河合隼雄監訳：「カルフ箱庭療法」 誠信書房, 1972.
- (3). 河合隼雄：「コンプレックス」 岩波新書, 1971.
- (4). 木村晴子：「箱庭療法」 創元社, 1985.
- (5). 木村晴子：「授業の中で心理療法の視点を生かす」 現代のエスプリ295
キャンパス・カウンセリングシリーズ, 1992.
- (6). 中井久男 山中康裕編集：「風景構成法」 中井久男著作集, 第1期別巻,
岩崎学術出版社, 1984.